

音楽を聴くのは、私の楽しみの一つである。クラシックを聴くことが多いが、ジャズも好きである。ルイ・アームストロング、サッチモの昔からのファンなので彼のディキシーランドジャズのトランペットの演奏とあの味のある濁声の歌をいつも楽しむ。

またマイルス・デイヴィスやジョン・コルトレーンなどのモダンジャズも好きで時々聴く。それに劣らず演歌や歌謡曲も愛すべき作品が多く、コロナ禍の前まで通っていた近所の行きつけのスタジオではカラオケで大抵五、六曲は歌っていた。今となってはあの頃が懐かしい。

私はこの頃たまにしかクラシック音楽を聴かないが、聴くとなるとモーツァルトを選ぶことが多い。一言で表現するのは難しいが、モーツァルトは私に生きる力を与えてくれる大切な音楽家である。悩んでいる時、悲しみに沈んでいる時も慰めてくれる。モーツァルトという人物はどういう人間であったのか今更ながら考えてしまう。

小林秀雄が『モーツァルト』の中でアンリ・ゲオンの言葉として *tristesse allante* (走るかなしさ) と言っているが、モーツァルトの長調の澄明で愉楽に満ちた楽曲も、あまりの透明な美しさ故に通奏低音としての *tristesse allante* を感じている。

昔『アマデウス』という映画を観たが、あそこに描かれていたのはあり余る才能に恵まれながら、卑しさも多分に持った強烈な個性の持ち主であった。我々凡俗な人間と同じ性的なモーツァルトであったり、多少常軌を逸したうんちやおならといった糞尿譚嗜好症(スカトロジー)のモーツァルトであったりする。恐らくあれほどの天才なのだから私のような凡人の尺度でははかり切れない人物だったに違いない。複雑な要素をいっばいに備えた快樂主義者(エピキュリアン)だったのだろう。それにも拘わらず彼の欲望や苦悩を超えた澄明な旋律はどこから生まれてくるのだろう。彼の言葉が残っている。

「・・・構想はあたかも奔流のように、実に鮮やかに心の中に姿を現します。しかしそれがどこから来るのかどうして現れるのか私には分からないし、私とてもこれに一指も触れることはできません。・・・だから後で書く段になれば脳髓という袋の中から、今申し上げたようにして蒐集したものを取り出してくるだけです。・・・」

信じ難いほどのうらやましい告白である。私のような非才の者とは別次元の話である。それだから映画の『アマデウス』に描かれているように、サリエリの如き嫉妬の虜になる芸術家も出るのだ。モーツァルト毒殺説の由来である。

ギイ・スカルベッタというフランスの作家の小説『サド、ゴヤ、モーツァルト』の中に記されているが、モーツァルトの私生活は惨憺たるものだった。つむじ風みたいに起こる貧乏ゆえの引っ越しの連続、休むことのない旅、絶えざる動揺、時間の浪費など平穏な生活とはほど遠いものだった。

尤もモーツァルト自身にとっても傑作だとされる曲は、平穩さとはかけ離れた騒動とあわただしさとせつは詰まった興奮のさ中で作られたものである。創作の奇蹟だ。

モーツァルトもゴッホと同じようにたくさんの手紙を残しているが、そこには借金を申し込むいたましい手紙が残っている。借金と引きかえに曲が生まれた時ちある。彼のような天才をもってしても音楽家として自立して生きていくのは難しい時代だったのだ。この借金にもいろいろ説があるようだ。モーツァルトは生活破綻者だったというのだ。そこから一節としてモーツァルト・ギャンブラー説などが生まれてくる。しかし死後は共同墓地に葬られて、現在は遺骨の在り処あも分らないモーツァルトのいたましい生涯に思いを馳せ、人生の非情さに肅然となる。

それにしても、モーツァルト晩年の音楽はなんとという神々しい美しさだろう。その深沈たる味わいは他の音楽家からはけっして聴くことのできない旋律である。クラリネット五重奏曲 ケッヘル K・五八一、クラリネット協奏曲 K・六二二、アヴェエ・ヴェルム・コルプス K・六一八、ピアノ協奏曲第二七番 K・五九五など、彼岸から響いてくる天上の音楽である。大分前になるが私は最後に足を運んだクラシックの演奏会でクラリネット協奏曲を聴いて改めてその感を深くした。

クラリネット協奏曲イ長調 K・六二二はモーツァルトの死のわずか二か月前に成立した文字通りの白鳥の歌である。クラリネットのために書いた唯一の協奏曲は高貴な美しさに満ちあふれ、管楽器のために作曲されたあらゆる作はモーツァルト自身の作品目録への記載から、一七九一年の九月二十八日から十月七日と考えられる。モーツァルトが若くして寂しく世を去ったのはその年の十二月五日である。

音楽の歴史には名奏者の卓越した技巧に触発されて名作が誕生した例が数多く見られるが、この協奏曲もそうした典型的な事例の一つである。当時ウィーンの宮廷楽団にいたアントン・シュタードラーは並ぶものがないクラリネットの名手として知られていた。同じフリーメーソン結社の言貝だったこともあってモーツァルトは彼と親交を結び、彼のために一七八九年には有名なクラリネット五重奏曲を作曲している。この協奏曲もシュタードラーを想定して書かれたことは間違いない。気高いまでに美しい第一楽章と第三楽章に挟まれたアダージョ二長調四分の三拍子の第二楽章は三部形式で成り、クラリネットのモノローグ風の静かで味わい深い緩徐楽章である。その深沈たる精妙な雰囲気はこの世との訣別を告げるような、欲望や苦悩を越えた、魂の奥底に訴える純粹無比の末期の音楽である。このような音楽が生まれたことは大仰な言い方だが奇蹟に近いと思われるのだ。それはどの器楽曲である。

私などいっしょいっしょ心境になるのは難しいだろうが、それでもふと自分の死期について考えることもあ
る昨今である。